

くらし

カンボジア・トレア村の子供たちに囲まれる植木力さん（中央）



内戦からの復興を目指すカンボジアの中部、トレア村にこのほど、小学校の新社舎が完成した。学校を建設したのは、文具、事務機器の通信販売や使用済みプリンター・カートリッジの回収事業を手掛けているカスターネット（京都市南区）の植木力社長。「トレア小学校で学んだ子供たちをいつか留学生として日本に受け入れたい」と、同社長は夢を語った。

学ぶ喜び カンボジアの子に

京の社長が学校建設 中古文具寄贈も

カートリッジ回収事業の中で、中古の鉛筆やノート、ボールペンなども引き取っていた同社。中古文具の使い道に困っていたが、カンボジアで文具など教育資材が不足していることを知り、二年前に寄贈を始めた。さらに、財団法人国際開発救援財団(FIDR)と支援の相談をするうち、首都プノンペンに近い隣接するコンボンチユナン州トレア村の小



完成したトレア小学校の新社舎

地雷撤去 支援も 京の機構

カンボジアでは、京都市下京区の元会社経営者佐藤登久代さん(79)が代表を務める日本地雷処理機構(JDA、事務局・神奈川県鎌倉市)も支援活動を続けている。

現地で隊員を雇い、ブルドーザーなどをを使って対人地雷の除去作業にあたってきたが、カンボジア政府の意向もあり、現在は地雷の回避教育に力を入れている。小学校などにポスターを張ったりノートを配り、地雷の避け方を伝えている。

一方、タイ国境に近い貧しい村に、マンゴーやパパイヤなど果樹の苗を贈っている。「栄養のある果樹を買わずに食べられるので、住民に好評」(事務局)という。以前は国際ボランティア貯金や外務省の援助を受けていたが、現在は公的支援はなく、鎌倉市のコーラスグループのチャリティーコンサートなどから寄付を受け活動を続けている。

学校の新社舎を建設することになった。カートリッジ回収事業の収益か

ら、校舎の建設費約三万円(二百三十万円)を寄付。さらに、小学校建設計画を知った日本中の小中学校からも中古文具が集まり、これらも贈った。トレア村に一つしかないこの小学校には、四百十四人が通学している。しかし、FIDRによると、カンボジアでは、一家の働き手となって就学を断念することが少なく、義務教育の小学校に六年間通い続ける子供は約半数だという。

ボランティアとして日本から竣工式に参加した女性(左)は、子供たちに折り紙を披露。一枚の色紙が「かぶと」に形を変え、学校は子供たちの歓声や拍手で包まれた。ある男子児童は「きれいな校舎でうれい。頑張つて勉強して、いつか日本に行きたい」とほほ笑み、この「かぶと」をかぶつて校庭を駆け回っていた。これを見た植木社長は、「学校建設だけに終わらせず、交流の中で日本の子供たちにも物の大切さや平和や命の尊さを伝えていきたい」と話していた。